

善導『觀經四帖疏』における見仏

岡 崎 秀 磨

はじめに

唐代の浄土教者、善導の教学の特徴は、阿弥陀仏を応身、その土を凡夫に相應した低い応土と解したのに対し、報仏報土である阿弥陀仏の浄土に凡夫が往生できるとした凡入報土説に求められる。このことを善導は、『觀無量寿經』（以下、『觀經』と記す）の注釈書である『觀經四帖疏』において明示した。『觀經』で説示される王舎城の悲劇の主要人物である韋提希を聖道諸師とは異なり凡夫と規定することで、聖者ではなく凡夫の救済を体系的に明かしたのである。

また、この『觀經』は禪觀經典との影響関係が指摘されているように「觀仏」「見仏」を組織的に明かした經典でもある。そのため、『觀經』において浄土往生と見仏とがいかなる関係にあるかを考察することは、凡夫の浄土往生と見仏とがいかなる関係にあるかと不可分の関係である。そこで本論では、善導が凡夫の救済をその姿に見た韋提希の見仏を取りあげ、

見仏と浄土往生との関係を韋提希の見仏に関する説示を中心として明らかにしていくことを目的とする。中心となる内容は、善導が『觀經四帖疏』「玄義分」得益門において韋提希の得忍を取りあげた際に提示された華座觀での得忍、光台現国での得忍否定である。

一 韋提希の得忍

善導は「玄義分」得門において韋提希の得忍に関して言及し、「序分義」においては韋提希の得た無生法忍の階位について言及している。「玄義分」得益門では、

問曰、韋提既言得忍。未審、何時得忍、出在何文。答曰、韋提得忍出在第七觀初。經云、仏告韋提、仏當為汝分別解脫除苦惱法。説是語時無量寿仏住立空中觀音勢至侍立左右。時韋提應時得見撰足作礼歡喜讚嘆即得無生法忍。何以得知、如下利益分中説言。得見仏身及二菩薩心生歡喜歎未曾有廓然大悟得無生忍。非是光台中見国時得也。問曰。上文中説言見彼国土極妙樂事心歡喜故應時即得無生法忍。此

善導『觀經四帖疏』における見仏（岡崎）

之一義云何通釈。答曰。如⁽¹⁾此義者但是世尊酬⁽²⁾前別請、舉⁽³⁾勸利益⁽⁴⁾方便之由序。（三七四頁）

と問答を起こし、韋提希の得忍が『觀經』光台現国における見仏ではなく、第七華座觀に説かれる無量寿仏、及び觀音・勢至の二菩薩が現れた時点での見仏によるものであると述べる。その根拠に「散善義」得益分を提示するが、その箇所では、

三從⁽⁵⁾三時即見極樂已下、正明⁽⁶⁾夫人等於⁽⁷⁾上光台中⁽⁸⁾見⁽⁹⁾極樂之相。四從⁽¹⁰⁾得見⁽¹¹⁾身及二菩薩已下、正明⁽¹²⁾夫人於⁽¹³⁾第七觀初⁽¹⁴⁾見⁽¹⁵⁾無量寿⁽¹⁶⁾時、即得⁽¹⁷⁾無生之益⁽¹⁸⁾。（五六四頁）

と述べている。「玄義分」では続いて、定善示觀縁において韋提希が無生法忍を得たとする記述に対して問答が起こされ、韋提希が浄土往生を請うた（別請）ことに対してあらかじめ利益（無生法忍）があることを示したもので、方便としての意味をもつと答える。この「序分義」定善示觀縁では、韋提希の得忍した無生法忍の階位が、

言⁽¹⁹⁾心歡喜故得忍⁽²⁰⁾者、此明⁽²¹⁾阿弥陀仏国清淨光明現⁽²²⁾眼前。何勝⁽²³⁾踊躍⁽²⁴⁾。因⁽²⁵⁾茲喜⁽²⁶⁾故即得⁽²⁷⁾無生之忍⁽²⁸⁾。亦名⁽²⁹⁾喜忍⁽³⁰⁾、亦名⁽³¹⁾悟忍⁽³²⁾、亦名⁽³³⁾信忍⁽³⁴⁾。此乃玄談未⁽³⁵⁾標⁽³⁶⁾得處⁽³⁷⁾。欲⁽³⁸⁾令⁽³⁹⁾夫人等⁽⁴⁰⁾悟⁽⁴¹⁾心此益⁽⁴²⁾。勇猛專精心想見時方⁽⁴³⁾應⁽⁴⁴⁾悟忍⁽⁴⁵⁾。此多是十信中忍非⁽⁴⁶⁾解行已上忍⁽⁴⁷⁾也。（四四〇頁）

と、喜忍・悟忍・信忍を内容とする十信中の忍であり、解（十解）行（十行）以上の忍ではないと、無生法忍の内容を従来

の「無量忍者。通亦遍在。別則不定。如龍樹説。初地已上亦得無生。若依仁応及与地經無生在於七八九地⁽²⁾」と指摘されるような、不生不滅の理に安住するといった高い階位ではなく、低い階位として規定している。

二 光台現国と華座得忍

では、光台現国と華座觀にある見仏の相違はいかなる点に見出されるのか。光台現国の場面では、韋提希の「請為我広説無憂之處」、「觀於清淨業處」の請いに応じて、「十方諸仏淨妙国土」が現出される。しかし、韋提希は無量の諸仏国土を見ることはできたとしながらも、再度「今樂生極樂世界阿弥陀仏所唯願世尊教我思惟教我正受」と、阿弥陀仏所に往生することを願ひ、教我思惟・教我正受と請う。この光台現国の説示において二点注目したい。第一に、韋提希自身は別選の理由を知らない、或いは直接的に語らないことである。善導は、「使⁽⁴⁸⁾如来密遣⁽⁴⁹⁾夫人⁽⁵⁰⁾別選⁽⁵¹⁾」といい、弥陀の浄土が四十八願を因として建立され、諸余の經典、諸仏たちが弥陀の浄土をほめたたえているという因縁を根拠として釈迦が韋提希に弥陀の浄土を選ばしめていると、韋提希の別選の背後に釈迦の密意を述べている。第二に、韋提希の別選所求・請求別行の後に釈迦が「即便微笑」することである。

如来以⁽⁵²⁾見⁽⁵³⁾夫人願⁽⁵⁴⁾生⁽⁵⁵⁾極樂⁽⁵⁶⁾更請⁽⁵⁷⁾得生之行⁽⁵⁸⁾、称⁽⁵⁹⁾仏本心⁽⁶⁰⁾又顯⁽⁶¹⁾弥

陀願意^甲因^二斯^二請^一「広開^二浄土之門^一、非^二直^二韋提得^レ去有識聞^レ之皆往有^二斯益^一」故。(四二七頁)

韋提希が極樂に往生したいと願い、そのための行を釈迦に請うた、その別選の意義が、仏(釈迦)の本心にかなうものであり、更に弥陀(阿弥陀仏)の願意をも顯すものであることをまず指摘し、続けてその請いがなされたがゆえに、韋提希が浄土往生できるのみならず、有識(有情・衆生)までもが韋提希と同じ益(浄土往生)しうる、以上のことを即便微笑の理由とする。有識とは『觀經』において重視される「未来世一切衆生」をを指すと考えられる。

善導は、この韋提希の別選について「玄義分」に次のように述べている。

偶因^下韋提致^レ請我今樂^二欲往^二生安樂^一。唯願如来教^二我思惟^一教^中我正受^上。然娑婆化主因^二其請^一故即広開^二浄土之要門^一、安樂能人顯^二彰別意之弘願^一。其要門者即此觀經定散二門是也。(三三八頁)

韋提希の別選という同一の請いから釈迦の要門(定善・散善)が開かれ、弥陀の別意の弘願(十八願)が顯彰されたという。善導は、光台現国において説示される韋提希の見仏から阿弥陀仏の浄土を求める別選へ、という經典の説示によって釈迦が説示したのは「要門」とする。光台現国において韋提希が見仏した「十方諸仏浄妙国土」は、あくまで諸仏が同一の立場であって、その中では弥陀の浄土も諸仏の浄土も価値は同

等と見るものであると考えられる。すなわち、光台現国では弥陀の弘願は明らかにされえないし、また、別選した後に説かれた教もまた要門であり弘願ではない。善導は、釈迦と弥陀との二尊の地位、境界を明瞭に区別し、釈迦の本意が要門にあることを明らかにしたのである。吉藏が『觀經』を「此經是釈迦仏説西方浄土事。非二仏説」⁽³⁾と述べていることに端的にあらわれているように、聖道諸師が『觀經』を釈迦の教説と理解するのは異なる善導の二尊二教説の立場が光台現国の解釈に明示されている。

ここで注目すべきは、釈迦の説示した内容が要門であるということを中心にして指摘しうる次の三点である。第一に、釈迦は「別意之弘願」を説示しない。娑婆の化主とされる釈迦は、その地位を嚴密に規定され、直接弘願を説くことはない。第二に、韋提希自身がその「請い」の理由を直接語ることはない、という意味で「請い」の理由については無知である。しかしながら、逆に釈迦はその韋提希の「無知」を知っていたといえよう。なぜなら、釈迦が開示する教説が要門であるということは、要門が弘願を顯すための不可欠な法門であるとともに、韋提希自身がその弘願・本願の救済の対象であること(凡夫)が韋提希自身に明らかになるという意味がなければならぬからである。それでこそ、韋提希の別選が釈迦の本心にかない、しかも、弥陀の願意をも顯すことに

善導『觀經四帖疏』における見仏（岡崎）

なるのである。第三に、釈迦の要門の開示が、韋提希だけでなく衆生（未來世一切衆生）が浄土往生しうる法門の開示ともなる。

このように考えれば、光台現国における韋提希の見仏とは、釈迦・弥陀二尊による救済法門が開示される機縁である。從來なされている光台現国での見仏は見土のみであることを考え合わせれば、釈迦の力用のみによる見仏であって、未だ弥陀が説示されてはいない。それゆえ善導は光台現国における韋提希の得忍を否定したのである。

では、華座觀における見仏はいかに理解されているのか。『觀經』華座觀に「仏告阿難及韋提希。諦聽諦聽。善思念之。仏当為汝分別解說。除苦惱法。汝等憶持広為大衆分別解說。是語時。無量寿仏住立空中觀世音大勢至是二大士。光明熾盛不可具見。百千閻浮檀金色。不得為比。時韋提希見無量寿仏已。」と説かれているのを善導は、

三從_レ説是語時_二下至_二不得為比_一已來、正明_下娑婆化主為_レ物故住_二想西方_一、安樂慈尊知_レ情故則影_中臨東域_上。斯乃二尊許_レ應無_レ異。直以隱顯有_レ殊正由_二器朴之類萬差_一致_レ使_二互為_二郢匠_一。言_二説是語時_一者正明就_二此意中_一即有_二其七_一。一明_下告_二勸二人_一時_上也。二明_下弥陀_レ聲即現証_レ得_二往生_一也。三明_下弥陀在_レ空而立但使廻_レ心正念願_レ生_二我國_一立即得_レ生也。（四七八頁）

と釈す。釈迦が「除苦惱法」を説かんとしたその言葉に応じて、無量寿仏が空中に住立し、韋提希は見仏するという。こ

の釈迦と無量寿仏との關係を善導は、釈迦は物（衆生）のために想いを西方に住せしめ、無量寿仏は情を知るために娑婆に影臨するといひ、釈迦・弥陀の二尊の意が一致していることを器朴の差、郢匠の喩によって示している。次に、經文の「説是語時」を解釈するに七つに分けるが、特に重要と思われる前三の意義に注目する。第一は、釈迦の阿難・韋提希への告勸である。第二に、弥陀は釈迦の「除苦惱法」の声に応じて現れ、韋提希が往生を得ることを証す。これは、韋提希の見仏が無量寿仏自らの救済意志に基づく出現を根拠とすることを明示するもので、衆生は無量寿仏の力用によって見仏せしめられ、さらには衆生の往生が証せられるという授記が成立すると理解されている。ここでも、光台現国と同じく、釈迦が直接「除苦惱法」を説かず、無量寿仏自らの出現として理解されている。第三に、弥陀が空中に住立するのは、韋提希等が廻心正念し浄土往生を願えば、即時に往生を得るとして、韋提希の「廻心」を求めている。こうした住立空中の所以を、善導はまた問答において示している。そこでは、

此明_三如来別有_二密意_一。但以下_下娑婆苦界雜惡同居八苦相燒動成_二違返_一。詐親含_レ笑六賊常隨_上。三惡火坑臨臨欲_レ入。若不_二拳_レ足_レ以_レ救迷業繫之牢何由得_レ勉。為_二斯義_一故立撮即行不_レ及_二端坐_レ以赴_レ機也。（四七九頁）

と、娑婆の苦界は、雑悪の衆生が同居し、三惡道の火の坑に墮ち入らんとしている状態にあるため、無量寿仏は急ぎ衆生救済へとはたらきでるのであって、その相を急ぎ立ち上がり、端坐していることはできないという「立撮即行」として示している。この住立空中・立撮即行の二義によって、「安樂慈尊知情故則影臨」が示されるのである。

善導は、このような『觀經』華座觀における見仏に対して特別な位置づけを行っている。聖道諸師が『觀經』を由序・正宗分・流通分の三分説をとったのに対し、善導は序分・正宗分・得益分・流通分・眷屬分の五分説をとったことに代表される善導の科文に対する研究では次のように結論付けられている。

かように夫人の得忍が十六觀—淨影等は、こぞつてその總てを定善と爲す—の説了より遙かに前であると主張する事は、彼女の得忍が十六觀以外の条件に依つて達せられた事を意味する結果となる。善導の言うその条件とは勿論「因仏力故。得見無量寿仏及二菩薩。」である。⁽⁴⁾

韋提希の見仏の直接的原因は釈迦の力用によりながらも、あくまで無量寿仏自らの出現による。無量寿仏が自身の意によつて住立空中・立撮即行として現れるのであって、釈迦が無量寿仏を現出させる、説き示すのではない。それゆえ、「除苦惱法」は無量寿仏そのものでなければならぬ。釈迦のは

たらきは、釈迦は「物」の想いを西方に住せしめること、すなわち、弥陀が知る「物」の「情」を開示する意義を有している。この点が、韋提希の別選に対して釈迦が密意をもって阿弥陀仏の淨土を選ばしめたという善導の解釈に見られるのであり、釈迦の教説が要門たる意義をあらわしているのである。

三 未来世一切衆生の見仏

「韋提希の得忍が十六觀の觀法以外の条件に依つて達せられた」とは、釈迦・弥陀の力用によらねばならないことを示す。見仏しえたにもかかわらず韋提希は続けて、自身の見仏は釈迦の力用を受けられたが、では仏（釈迦）滅後の無仏における衆生はどのようにすれば同じように見仏（得無生法忍）できるのかと問う。

五從^レ白^レ言^レ下至^二及^二二菩薩^一已來、正明^下夫人領^二荷^二仏恩^一為^レ物陳^レ疑生^中於後問^上。此明^下夫人意者^レ仏今現在蒙^二尊加念^一得^レ觀^二彌陀^一仏滅後衆生言何可^レ見也。（四八〇頁）

「仏滅後の衆生」という視点は、『觀經』全体にわたる問題意識といえる。例えば、定善示觀緣・散善顯行緣などにおいても言及されている。ここで注目したいのが、善導が定散二善を聖道諸師とは異なり、定善は韋提希の致請、散善は仏自開と理解したことである。釈迦の存在は、密意をもつて韋提

善導『觀經四帖疏』における見仏（岡崎）

希に阿弥陀仏の浄土を選ばしめたこと、無量寿仏・弘願においてこそ凡夫の救済が成立しうることを明かすことにその意義が求められることを確認した。それならば、釈迦自ら散善を自開した目的は韋提希が問うた未来世一切衆生へと向けられたものであるといえよう。

三福九品を説く散善が、下品下生において「汝若不能念者、應称無量寿仏如是至心令声不絶、具足十念、称南無阿弥陀仏」と説示される称名へと集約されることは、善導が釈迦の説示の根本的意趣を示して、

上來雖説「定散兩門之益」、望「仏本願」意在「衆生一向専称「弥陀仏名」。(五六七頁)

と述べていることから理解できる。また、『觀經』九品段において、上品上生から下品中生までは「阿弥陀仏」の名が使われていたにもかかわらず、下品下生では「無量寿仏」の名が使われていることは、「阿弥陀仏」と「無量寿仏」が同一の仏であることを示すことと共に、『觀經』流通分における「持無量寿仏名」へと接続させる意図を読み取ることができよう。

ここで、釈迦の教説の意が集約される下品下生の説示、及び仏の本願の意にある「弥陀仏名」と華座觀得忍における住立空中する仏とは共に「無量寿仏」であることがわかる。先に、住立空中する無量寿仏は、釈迦が説示するのではなく、無量寿仏自ずからの現出であることを確認した。それならば、「衆

生が見仏を行うということは、救済者としての阿弥陀仏自らが、被救済者としての衆生の眼前に、その有相を衆生の現生中に顕現するということと理解することができる⁽⁵⁾との指摘を考え合わせるならば、善導において「無量寿仏の名を称える（称名）」という「一向専称弥陀仏名」の行は、釈迦・無量寿仏（弥陀）・凡夫（韋提希）が有機的な対応関係を構築するものといえよう。すなわち、称名においてこそ凡夫の見仏が成立すると考えるのであるが、ここで重要な契機となるのが「命終時」という時間概念と、無量寿仏の現出である。

凡夫の称名が見仏をも成立させる行となりうるのは、「平生が平生として、その根底にそれが内包している究竟の意味が、成仏道を成就せしめる根源的契機となりうるのは、臨終との内的関係においてである。臨終の無い平生は、抽象的永遠でしかない⁽⁶⁾」と指摘されるように、平生がまた臨終という意味を内包していなければならない。これは、善導が『觀經』真身觀の「念仏衆生攝取不捨」を釈して、親縁・近縁・増上縁を述べる中、

三明「増上縁 衆生称念即除「多劫罪」「命欲」終時仏与「聖衆」「自来迎」撰。諸邪業繫無「能礙者」故名「増上縁」。(四九四頁)

といい、衆生の称念と臨終時、仏の「自来迎撰」を関連させていることから理解されよう。つまり、住立空中において「廻心」が語られ、韋提希の請いに応じて定善だけでなく散

善が説示されていたように、見仏―称名という行の成立には「信心」が介在するものでなければならない。散善九品に共通する信心として至誠心・深心・廻向発願心を善導が詳細に論じたこともここに所以があると考えられる。

小結

「玄義分」得益分の説示に従い韋提希の見仏得忍を中心として考察を行った。光台現国での見仏得忍が否定され、華座観での見仏得忍が認められるのは、無量寿仏自身の自ずからなる現出があるか否かである。その現出は住立空中・立撮即行によって象徴的に顕彰された。この際注意すべきは、無量寿仏自身が光台現国の見仏で明かされた釈迦の要門を不可欠な要素としていることである。加えて、韋提希自身の別選への無自覚な態度は、釈迦が説き示す要門が韋提希自身を無量寿仏の現出へと導くことを意味すると考えられる。それ故にこそ、釈迦は散善を自ら開き、至誠心・深心・廻向発願心の三心と共に、下々品の機たるものに称名を説き示したのである。従って、十六観から独立し象徴的に顕し出された華座観での見仏（無量寿仏の現出）は、韋提希、及び未来世一切衆生という視点を契機として、下々品の称名へと集約され、称名―往生という構造の中に位置づけられることとなったのである。

- 1 本論文での引用は、『浄土真宗聖典 原典版 七祖篇』より行い、頁数は本文中に記載する。
- 2 『大乘義章』大正四四・七〇二a。
- 3 『観無量寿経義疏』（大正三七・二三四b）。
- 4 正木晴彦『観経疏』に於ける科文の問題」、中村元博士還暦記念論集『インド思想と仏教』、春秋社、一九七三。
- 5 柴田泰山『善導教学の研究』、山喜房仏書林、二〇〇六、四五七頁。
- 6 武田龍精『親鸞浄土教と西田哲学』、永田文昌堂、一九九一、六三〇頁。

〈キーワード〉 韋提希、見仏、得忍

（龍谷大学非常勤講師・博士（文学））